

多文化コミュニケーション能力測定尺度作成の試み[†]

宮本 律子*

秋田大学教育文化学部

松岡 洋子**

秋田大学教育文化学部非常勤講師

1998年12月、秋田大学、新潟大学、信州大学、福井大学の日本事情関連授業の一環として合宿研修を実施し、参加学生に対してアンケート調査を行った。この調査を整理、分析した結果、「合宿で学んだこと」についての自由記述を中心に異文化コミュニケーション能力の要素に関して多くの記述があることがわかった。本研究では、この分析結果から得られた項目を異文化コミュニケーション能力の構成要素に関する先行研究と対照させ、ホスト文化である日本における日本語を主とした異文化コミュニケーション場面に見られる特徴を「留学生」「日本人学生」双方の視点から分析した。更に、そこから見いだされた項目を教育効果検討のための尺度として試作したものを1999年度の同様の合宿において試用した。

キーワード：異文化コミュニケーション能力、多文化コミュニケーション、留学生と日本人学生、教育効果尺度

1. 研究の目的

複数大学合同多文化合宿に参加した学生のアンケート調査に基づき、多文化コミュニケーション教育の効果を検討するための尺度作成を試みる。

2. 研究の背景

2-1. 異文化コミュニケーション科目の創設

宮本(1995)では、留学生と日本人学生の交流実態を調べた結果、双方とも交流の必要性を感じているにもかかわらず、その欲求が満たされていないことが明らかになった。このような状況の背景を留学生の側から見ると、従来の日本語教育が文法能力、談話能力、社会言語能力、ストラテジー能力といった言語能力習得中心に行われ、効果的なコミュニケーションを行なうための能力やスキルの養成という点

において不十分であったことが考えられる。また、日本人学生においても、異文化的背景を持った学生とのコミュニケーションに必要なノウハウをほとんど持っておらず、それを獲得する場もなかった。そこで、留学生と日本人学生との異文化コミュニケーション活動の促進を目的とした授業が、様々な大学で実践され始めている。本学における日本事情の実践もその一つである(宮本・松岡1999)。しかし、そこではいくつかの問題が浮かび上がってきた。

(1) 多文化状況におけるコミュニケーション教育の方法論が確立されていない

従来、異文化コミュニケーション・トレーニングといえば、これから留学したり、海外に行き仕事に従事したりする人たちのための事前訓練であったり、また、留学生や研修生を対象に、ホスト文化にできるだけ早く順応するための同化教育的なものであったりした。すなわち、そこで訓練を受ける者は「日本人だけ」あるいは「留学生だけ」というモノカルチュラルな状況にあった。教授者もしくはトレーナーは、対象者がこれから遭遇するであろう文化摩擦やコミュニケーションギャップ

2000年1月21日受理

[†] Scales to measure multi-cultural communication competence

* Ritsuko MIYAMOTO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

** Yoko MATSUOKA, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

プについて、知識を注入し、対処法を訓練すればよかった。このような異文化コミュニケーション・トレーニングの方法論は、平和部隊を創設したアメリカを中心にある程度まで確立されてきた。しかし、本学での実践のように、コミュニケーション能力の訓練もしくは養成の対象者がマルチカルチュラル（多文化的）な状況にあっては、どのような項目をどのような形で訓練するのかという方法論が未確立である。ここ数年の間に各大学で行われてきた異文化コミュニケーション授業は、単に交流することだけを実践してきたものが多く、方法論としては先のアメリカ式をなぞっているものが少なくない。今まで、日本の大学における多文化状況でのコミュニケーション教育の内容と方法論は議論されてこなかった。

(2) 授業効果の検証法がない

多文化状況におけるコミュニケーション教育の効果を測る尺度がない。教師側からの評価と学生側からの評価をどのように行なうかを確定する必要がある。

2-2. 異文化コミュニケーション教育と多文化コミュニケーション教育

ここで、本研究における「異文化コミュニケーション」と「多文化コミュニケーション」の定義を明らかにしておく。倉地（1992）は「異文化コミュニケーションとは、文化の壁を越え、人間同士の理解に向かう相互作用（interaction）のプロセスである」と述べている¹⁾。石井ら（1997）は「文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により、相互に影響し合う過程である」と定義づけ、「異文化コミュニケーションは異なる文化背景の人たちによるコミュニケーション活動であるために」同文化の者同士によるコミュニケーションに比べ「特別な注意と努力を要する」と述べている²⁾。

本研究では、異文化コミュニケーションとは、「文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により行なう相互作用のプロセスである」と定義する。そして、このコミュニケーション活動上起こる相互作用が同文化間の場合とは異なるために必要な「注意」と「努力」を具体的な行動に反映させるための知識、情動、行動などは習得可能であるという前提で、そのような項目を養成することを異文化コミュニケーション・トレーニングと呼ぶ。更に、先の研究の背景でも述べたように、対象者の文化背

景が一様でない多文化状況の中で必要な異文化コミュニケーション能力を多文化コミュニケーション能力と呼び、そのような能力を訓練したり、獲得したりする場を「多文化クラス」という用語をもって言及する。また、ここで行なわれる教育を、従来のモノカルチュラル的な異文化コミュニケーション・トレーニングと区別するために、多文化コミュニケーション教育と呼ぶことにする。

3. 課題

以上のことを踏まえ、次の2点を確認したい。

- (1) 留学生、日本人学生双方の変化がなければ円滑な多文化コミュニケーションは成立しない
文化的・言語的ホストである日本人と、同ゲストである留学生とでは以下のようにコミュニケーション活動における立場が異なることが考えられる。

①日本人学生

- ・母語による活動である。
- ・留学生との異文化コミュニケーション能力が求められる。

②留学生

- ・外国語としての日本語運用力が必要である。
- ・文化的ゲストであるため、異文化適応を求められる。

しかし、上記に見たように、異文化間のコミュニケーションとは、文化的背景を異にする人たちが、メッセージの授受により行なう相互行為のプロセスであるのだから、日本の大学における多文化コミュニケーションというコンテキストにおいては、留学生のみに適応学習を課す、あるいは逆に日本人学生のみを対象にして「留学生との接し方」といった一方向的トレーニングをするのでは意味がない。留学生、日本人学生双方の変化がなければ「真の人間同士の理解に向う相互理解」（倉地）とはならないのである。

- (2) 多文化コミュニケーション教育の方法確立の手がかりが必要である

そこで、本研究の課題は「日本の大学における留学生、日本人学生に必要な多文化コミュニケーション能力を探る」ということになる。すなわち、多文化コミュニケーション能力の内容検討である。円滑な多文化コミュニケーションのためにはどのような能力が必要なのか、どのような項目を取り

上げれば、効果的な多文化コミュニケーション能力養成が行なえるかを探るとのことである。

4. 研究方法

1998年12月、秋田大学、新潟大学、信州大学、福井大学の日本事情関連授業の一環として合宿研修を実施し³⁾、参加学生に対してアンケート調査を行った。合宿後の自由記述による学生の反応を次の方法で整理・分析した。

- a 先行研究との対照
- b KJ法による分類

5. 結果

5-1. 多文化コミュニケーション能力項目の抽出と分類

異文化コミュニケーション能力構成要素について

の研究はアメリカを中心に多くなされているが、日本でもいくつかの研究が見られる。

ガウランら (1996) は Kim (1991) などを参考にして「動機・態度」「知識」「技能」の3項目を提示し、異文化コミュニケーション能力の測定尺度化を試みている。石井ら (1997) は「態度 (認知・情緒)」と、「行動」「技能」「性格」という4項目をあげている。山岸ら (1992) は「カルチュラル・アウェアネス」「自己調整能力」「状況調整能力」の3項目とこれら全てに関係する「感受性」を異文化環境での成功要因としてあげ、「異文化対処能力」測定を試みている⁴⁾ (資料1参照)。これらの項目は個々には重なるところが多いが、分類の視点が異なっている。石井らの「態度」に分類された要素は山岸らの「カルチュラル・アウェアネス」に異文化に対する知識面を付加させたもの、「行動」は「自己調整能

資料1 先行研究による異文化コミュニケーション能力要素の分類
(宮本・松岡による作成)

デニス・S・ガウラン, 西田司編 (1996) 『文化とコミュニケーション』pp. 162-179		石井敏他編 (1997)『異文化コミュニケーションハンドブック』pp. 17-21		山岸みどり他 (1992)『「異文化間能力」測定の試み』	
動機	否定的な結果を考えることからくる不安	態度	情緒	カル チュ ラル ・ アウ ェ ア ネ ス	①自文化 (自己) への理解 ②非自民族中心主義 ③外国文化への興味
	相手の行動を予測できないことからくる不確実感		①感情移入 ②非自民族中心的態度 ③非偏見の態度		
態度	自己の集団の基準でもって相手を判断する自民族中心的傾向	認知	①個人的文化的アイデンティティ保持②個の多様性を知る ③自他文化及び他者を客観的に査定する④肯定的かつ現実的な期待をする⑤専門的な知識を持つ	自己 調整 能力	①寛容性 ②柔軟性 ③オープンネス
	相手の帰属集団に関する予断 (偏見)		①対人関係樹立②相互作用 ③尊敬表示④判断留保・描写的表現⑤利他的行動⑥自発性 ⑦道徳		
知識	文化背景の異なる相手への接近と回避の傾向	行動	①仕事遂行②言語・非言語操作③機略縦横	状況 調整 能力	①コミュニケーション ②対人関係マネージメント ③判断力 ④知的能力
	新しいことや異質なことを積極的に取り入れる傾向 (不確実性志向)				
技能	異なる集団に関する知識	性格	①高い動機 ②異文化への知的好奇心など	上記3つの要因すべてに関わる項目として「感受性」	
	新しいカテゴリーの創造, 新しい情報の受容, 複数の考え方の容認 (マインドフルネス)				
	効果的なコミュニケーションに必要な情報が不足している状況における対処 (曖昧さに対する許容)				
	相手の体験を解釈する時相手の行動基準を用いる (感情移入)				
その他	相手の行動に適應, 順応させる (行動の適應)	その他	①高い動機 ②異文化への知的好奇心など	上記3つの要因すべてに関わる項目として「感受性」	
	相手の行動予測と説明				
	コンフリクトの管理				

力」と「状況調整能力」の一部（対人関係マネジメント）、「技能」は「状況調整能力」と、それぞれ同類のものと捉えられる。ガウランらの分類は他の2つと比較して視点がやや異なるが、要素としては類似している。

本研究では異文化コミュニケーション要素についての先行研究を参考にアンケート結果から多文化コ

ミュニケーション能力についての記述を取り出してまとめた。更に、これらをKJ法により「行動」「技能」「認知」「情動」に4分類した。（資料2参照）。

「行動」は、多文化状況における自己のコミュニケーション行動を調節する能力で、アンケート記述には「意欲を持つ」「自分から（コミュニケーションの）機会を作る」「積極的に行動する」などのよ

資料2 学生が記述した異文化コミュニケーション能力に関する項目

属性	記述	分類	属性	記述	分類
日	じっくり話す	A	日	相手の声（本音・意見）を聞く	C
日	じっくり聞く	A	日	相手文化について知る	C
日	意欲を持つ	A	日	多様な価値観を認識する	C
日	気軽に話しかける	A	日	多様な考えを認める	C
日	共通点を見いだす	A	日	過去を知る	C
日	考えを出す	A	日	各文化を一般化することは難しいと認識する	C
日	自己開示する	A	日留	個々に文化があることを認識する	C
日	自分から機会を作る	A	日留	国の差より個人差が大きい	C
日	自分から話を始める	A	日留	自国・他国の状況を知る	C
日	自分の意見を表現する	A	日留	相手文化を理解する	C
日	真剣に取り組む	A	日留	文化とは個々の価値観、認識の違いだと知る	C
日	積極的に行動する	A	日留	違いを認識する	C
日	相手に関心を持つ	A	日留	違いを知り、認め合う	C/A
日	相手を理解しようとする	A	日	ふれあいの暖かさを知る	D
日	他人の意見を聞く	A	日	思いやる	D
日	同じ意志をもつ	A	日	相手の立場にたって考える	D
日	文化差を埋める	A	日	壁を取り払う	D
日留	多様な人と話す	A	日	勇気をもつ	D
日	アイコンタクト・ジェスチャーで意思伝達する	B	日	友情を感じる	D
日	うなずく	B	日	理解しあう気持ちを持つ	D
日	経験を活かす	B	日	やる気を持つ	D
日	笑顔で声をかける	B	日留	共感する	D
日	相手の言語能力に留意する	B	日留	心を開く	D
日	聞き返して確認する	B	日留	仲良くなるとうとする気持ちを持つ	D
日	話題をどんどん展開する	B	日留	偏見をなくす	D
日留	自分の意見を明確に伝達する	B	留	信頼する	D
日留	語学力をつける	B	日	ユーモアを持つ	D
留	言葉を通じさせる	B	日	自信を持つ	D
留	言葉の意味を明確にする	B	日	不安を取り除く	D
留	多様な表現方法を使う	B	日	雰囲気をやわらかくする	D
留	日本語でコミュニケーションする	B	日留	リラックスする	D
留	日本語で表現する	B			
留	日本語の知識をもつ	B			
留	日本語を聞いて理解する	B			
日	マイノリティの心細さを理解する	C			
日	共通性を認識する	C			
日	個人差ではない文化差もあると認識する	C			
日	国内にも文化差があることを理解する	C			
日	自己理解する	C			
日	自分の意見を明確にもつ	C			
日	人間の多様性を理解する	C			
日	相手の習慣を知る	C			

<記号・略語>

A = 行動 B = 技能 C = 認知

D = 情緒

日 = 日本人学生 留 = 留学生

<整理・分析したアンケートの質問>

- この合宿は、普段の授業と比べてどうでしたか。自由に書いて下さい。
- この合宿では何を学びましたか。
- この合宿に関する感想を自由に書いて下さい。何でもいいです。

うに、自発的行動に関する言及が目立つ。「技能」は行動を具現化させるための戦略で、記述には「聞き返して確認する」「話題をどんどん展開する」などの言語戦略に関するものと、「うなづく」「アイコンタクト、ジェスチャーで意志伝達する」といった非言語戦略についての要素が日本人学生から多く出された。「認知」は、自文化、相手文化、文化の多様性に関する知識能力、いわば「頭」の部分で、自文化と相手文化との違いと同時に共通点を認識する重要性についての記述が目立った。また、相手の習慣、状況について理解すること、多様な価値観を認めること、自己理解することについての記述も見られる。「情緒」は認知に対して「心」の部分で、コミュニケーションの際の心的態度である。アンケートには思いやり、共感など相手に対する心情、不安除去、自己開示など自身のコミュニケーション参加に対する心情面の言及があった。また、留学生からは「(相手を)信頼する」という反応が目立った。

5-2. 先行研究との対照

アンケート結果から抽出された「行動」と「技能」の各要素は、先述した石井らの示す「行動」「技能」とそれぞれ重なる部分が多い。同じく「認知」は認知的「態度」、**「情緒」**は情緒的「態度」と共通するものが多く、この意味で合宿参加者の反応から抽出された項目は石井らの考え方を支持するものである。

異文化コミュニケーション能力は、山岸(1997)が述べているように、異質なものへの共感、多元的な視点、他者の立場に立った思考力、批判的思考力などが含まれるが、それらが「教育実践で育成されるかどうかについて、まだ十分な確証が得られていない⁹⁾。しかし、これらの先行研究であげられている項目が合宿アンケートの記述から抽出された要素と重なることから、多文化コミュニケーション能力について参加者に意識化させる体験学習の場として合宿の教育的効果が期待できる。ただし、その検証法は確立されておらず、なんらかの検証法が必要となる。

5-3. 留学生と日本人学生の反応差

「行動」面では、日本人学生の記述が大部分で、留学生からは「多様な人と話をする」という記述が見られただけであった。「技能」では、日本人学生が非言語戦略について多くの記述している

の比べ、留学生からは日本語能力についての記述が多かった。ゲスト言語によるコミュニケーションにおいて言語能力は重要な能力であると再認識されたためであろう。「認知」では、日本人学生から相手文化についての知識の必要性に関する記述が出されている。日本人学生は普段留学生を含む異文化の人たちとの接触機会が少ないため、今回の合宿のように密度の高い異文化接触場面では体験からの気づきが大きかったことがわかる。一方、留学生は日本人の中に多様性を発見し、個人差を認識することの重要性に気づいたようである。「情緒」では、留学生に「信頼する」と述べているものが多く、日本人に対して信頼感を持つような関係が構築され、その重要性を認識したものと考えられる。これに対して日本人学生は、勇気、思いやり、ユーモア、自信など留学生の態度から学んだことについて記述したものが多く、

このように、文化的・言語的ゲストである留学生と同ホストである日本人学生とは記述に差がある。

6. 尺度の試作、試用

以上を踏まえて、多文化合宿の効果を検証するための尺度の作成を試みた。本尺度は、アンケートから抽出した異文化コミュニケーション能力の代表的な項目から構成されている(資料3参照)。

1999年11月に前年度と同様の合宿を実施した⁹⁾際、上記試作版尺度を使用して、合宿前の異文化コミュニケーション能力に対する自覚(どのぐらい大切だと思うか)と、合宿時の異文化コミュニケーション能力使用に対する自己評価(どのぐらい重視したか)を比較した。

全体的な傾向として、若干ながら「共通点を見出す」(行動)、「身振り、表情」「言語能力」(技能)、「相手を信頼する」「共感」(情緒)、および「興味」は合宿前に比べ、合宿後の調査では数値が上がっている。一方、「人の話を聞く」「相手を尊敬する」「積極的に行動する」(以上、「行動」)、「偏見をなくす」(「認知」)の4項目は合宿直前に「大切だ」と判断されているにもかかわらず、合宿直後には「あまり重視しなかった」という反応がやや増えている。しかし、数値としては調査の前後の差はほとんど見られず、統計的な検討も行なわなかった。項目の分類間の差違も全体としてはほとんど見られなかった。ただし、個々のデータを詳細に見ると個人差があり、

資料3 尺度試作版

<質問> 合宿前：どのぐらい大切だと思いますか。

合宿後：どのぐらい重視しましたか。

	1	2	3	4	5	6	7
a 人の話を聞く							
b 相手を尊敬する							
c 共通点を発見する							
d 自分の意見を言う							
e 積極的に参加する							
f 身振り、表情							
g 言語能力							
h 相手を理解する							
i 多様性を認める							
j 自分を理解する							
k 違いを認める							
l 自分を開く							
m 相手を信頼する							
n 自信をもつ							
o 共感							
p 興味							
q 不安をなくす							
r 偏見をなくす							
s リーダーシップ							
t 我慢強さ							
u 寛容さ							
v 客観的に判断する							

1 = ぜんぜん重視しない

2 = ほとんど重視しない

3 = あまり重視しない

4 = どちらともいえない

5 = やや重視する

6 = かなり重視する

7 = とても重視する

合宿前後で反応が大きく変わっている参加者も存在する。

7. 考察・まとめ

多文化コミュニケーション能力はさまざまな教育活動を通じて養成できるという前提で、多文化合宿を行っているが、そこには次のような不明確な点がある。

- ① 多文化コミュニケーション能力の構成要素
- ② 多文化コミュニケーション能力養成の方法論
- ③ 活動の評価方法
- ④ 自文化圏で必要とされる能力と、ゲスト文化圏において必要とされる能力の差違

本稿では、合宿参加者に対するアンケートの自由記述から多文化コミュニケーション能力に関する項目を抽出し、合宿活動から参加者自身が認識する要素がどのようなものかを確認した。抽出された要素は「行動」「技能」「認知」「情緒」の4つに分類された。これに基づき、合宿活動の評価を目的として評価尺度を試作した。

合宿評価は次のような目的で行われる。

(1) 教師による活動評価

- ・合宿でなにがどのように行われ、多文化コミュニケーション能力獲得にどのような効果があったかを確認することで、合宿活動の方法論確立の資料を得る

- ・参加者個々の変化を把握し、適切な助言を行なう
- (2) 参加者の自己評価
 - ・参加者が合宿活動でなにをしたか、網羅的に振り返り、自己の変化を認識する
 - ・参加者の能力について意識化し、自分に必要な能力を把握する

今回は、尺度を試作したが、項目の妥当性、設問の方法などの検討は今後の課題となった。検討方法として、先行研究、および自由記述データから抽出された多文化コミュニケーション能力の要素の重要度に関するアンケートを再度行い、統計的分析により妥当性を確認することが可能である。また、合宿効果の検討については、合宿参加者と一般の学生(合宿に参加しない学生)との比較検討がまず必要である。次に、合宿前後の変化をどのような設問によって明らかにするか、いくつかの方法を試みて比較検討するべきであろう。

付 記

なお、本論文は、平成9年度文部省科学研究費(基盤研究C「多文化クラスの大学間および地域相互交流プロジェクトの実施と評価に関する研究」課題番号09680297)を受けて実施した研究成果の一部であり、香港理工大學における第4回国際日本語教育・日本研究シンポジウム(1999年11月20日)における口頭発表原稿に加筆修正をほどこしたものである。共同研究者として脇田里子(福井大学)、小山宣子(弘前大学)、徳井厚子(信州大学)、土屋千尋(愛知県立大学)、宇佐美洋(国立国語研究所)、足立祐子(新潟大学)、押谷祐子(元新潟大学)各氏の協力を得た。

注

- 1) 倉地暁美(1992), p. 1
- 2) 石井他編(1997), p. 7
- 3) この詳細については、宮本・松岡(1999)を参照。
- 4) 山岸みどり他(1992):「異文化間能力」測定の試み, 渡辺文夫編『現代のエスプリ299』p. 201-214
- 5) 山岸みどり(1997): 異文化間テラシーと異文化間能力, 『異文化間教育11』, p. 50
- 6) 1999年11月12日~14日に、福島県磐梯国立青年

の家において前年と同様の合宿を実施した。参加大学は秋田大学、福井大学。参加者総数は学生50名、教員8名。内容は前年度とほぼ同じで、異文化コミュニケーショントレーニング、および共同作業を行った。

<参考文献>

- 石井敏・久米秋元・遠山淳・平井一弘・松本茂・御堂岡潔編, 1997: 異文化コミュニケーションハンドブック, 有斐閣選書
- 江淵一公, 1994: 異文化間教育学序説, 九州大学出版会
- ガウラン, デニス・S・西田司編, 1996: 文化とコミュニケーション, 八朔社
- 倉地暁美, 1992: 対話からの異文化理解, 勁草書房
- 佐々木由美, 1998: 初対面の状況における日本人の「情報要求」の発話, 異文化間教育12, pp. 110-127
- 佐野正之・水落一朗・鈴木龍一, 1995: 異文化理解のストラテジー, 大修館書店
- 関口一郎編, 1999: 現代日本のコミュニケーション環境, 大修館書店
- 土屋千尋他, 1998: 多文化クラスの大学間及び地域相互交流プロジェクトの実施と評価に関する研究, 研究成果中間報告書, 平成9年度科学研究費補助金基盤研究(C) 課題番号09680297
- 土屋千尋・小山宣子・徳井厚子・脇田里子・足立祐子・宮本律子, 1998: 多文化クラスにおける共同作業の試み—大学間交流と相互コメント, 異文化間教育学会第19回大会発表抄録
- 松岡洋子・宮本律子, 2000: 多文化状況での日本語コミュニケーション能力, 秋田大学教養基礎教育研究年報第2集(予定)
- 宮本律子, 1995a: 秋田地域における留学生と日本人学生の交流実態及び価値観の比較研究, 秋田大学基礎教育研究紀要, 第2集, pp. 41-57
- 宮本律子, 1995b: 「日本事情」をどう教えるか—秋田大学における実践報告(1), 秋田大学教育学部教育工学研究報告, 第17号, pp. 1-11
- 宮本律子・松岡洋子, 1999: 「日本事情」のオリエンテーション教育としての意義—複数の授業形態の実践を通じて—, 秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要, 第21号, pp. 63-71
- 宮本律子・松岡洋子・脇田里子・小山宣子・徳井厚

- 子・土屋千尋・宇佐美洋・足立祐子・押谷祐子, 1999 :
実践報告 : コミュニケーション教育としての日
本事情教育—複数大学の日本人・留学生合同合宿
を通して—, 日本語教育学会春季大会予稿集
山岸みどり, 1997 : 異文化間リテラシーと異文化間
能力, 異文化間教育11, pp. 37-51
渡辺文夫編, 1992 : 国際化と異文化教育: 日本にお
ける実践と課題, 現代のエスプリ299, 至文堂
Kim, Y. Y. 1991: Intercultural communication com-
petence: A systems-theories view. in S. Ting-
Toomey & F. Korzeny (eds.), *Cross-cultural
interpersonal communication*. pp. 259-275
Samovar, L. A. & Porter, R. E. (eds.), 1991:
Communication between Cultures, Wadsworth
Publication

Summary

In this study, we attempt to develop scales to measure students' multicultural competence, in order to develop effective cross-cultural training programs in the context of Japanese university education. It is based on an analysis of a questionnaire given to students participating in an inter-university communication workshop which was held in December, 1998

Key words: Inter-cultural communication competence, Multicultural communication, Foreign students and Japanese students, Effective educational scales

(Received January 21, 2000)